

高齢移民の語る暮らしとエイジング
Older migrants' stories of their lives and ageing

牧田幸文 (福山市立大学)
MAKITA, Yukifumi (Fukuyama City University)

キーワード： エイジング 移民 中国帰国者

1. 問題の所在と先行研究

日本では、高齢者の増加により介護労働者のニーズが高まる中、2008年から外国人介護労働者の受け入れが始まり、ケアと外国人労働者については多くの研究蓄積がある。一方で、在日コリアン以外で日本に定住し、高齢期に入った移民が老いながらどのように暮らしているのかというエイジングに注目した研究は、老年社会学をはじめ移民研究の分野でもはじまったばかりだと言えるだろう。高齢者は年を重ねる過程で、身体的、精神的、社会経済的な変化を経験し、多くの人たちが自分の衰えを自覚しながら暮らしている。高齢者のエイジングについては、サクセスフル・エイジングとして、これまでの中年期に蓄積したライフスタイルを維持しながら暮らすことが、理想の高齢期と言われている。一方で越境し、変化の多いライフコースを生きてきた高齢移民のエイジングはどのようなものだろうか、彼らはどのように高齢期を迎え、暮らしているのかを明らかにすることが本研究のテーマである。

グローバル化による移民を含めた人口の高齢化は、老年社会学、エスニシティや移民研究の分野でも、比較的新しい研究テーマとなっている (Warnes and Williams 2006, Phillipson 2015, Zubair and Norris 2015)。高齢の移民が増加する中で、ヨーロッパでは「人種・エスニシティ研究と老年社会学の研究内容は重なっている」(Warnes and Williams 2006:1260) と指摘されている。高齢期を迎えた移民は、彼等の越境の経験から、ホスト国で暮らす、あるいは自国に帰国する、また両方の国を行き来する等、多様なエイジングをきている。しかしながら、スウェーデンのエスニック・マイノリティ高齢者研究を行っているトレスによると、高齢の移民はケアの文脈では、文化的・言語的「特別なニーズ」が必要な高齢者とされ、同一の社会カテゴリーとされてきたと指摘する。移民はエスニシティや出身国、移住してきた年月によって多様であるにもかかわらず、高齢の移民は「社会の問題」として「他者化」され、「弱い人」たちとして、一括りにされてきたという (Torres 2016:21-22)。日本でも、外国籍住民への支援に関する研究によって、高齢移民はケア資源へのアクセスの面で「特別なニーズ」が必要な人たちとして報告されてきた。それらの研究が、高齢移民の生活支援の充実に提言してきたことは重要である。しかし、移民の高齢者を「特別なニーズ」が必要な、「弱い人」というカテゴリーに入れるだけではなく、これまでの流動的なライフコースの影響を受けながら暮してきた高齢者として理解する必要があるだろう。そこで本研究では、3人の中国帰国者の語りから、彼らは日本でどのように地域の社会的資源を活用しながら、エイジングをきているのかを明らかにし、地域での彼らの役割について提示したい。

2. 対象者と調査方法

本研究では、高齢移民の複雑なライフコースとエイジングを理解するために、インタビュー調査と参与観察を実施した。調査は2019年から開始し、現在も参与観察は継続している。調査は、戦前満洲へ多くの移民を送り出したA県のB市とC市で行った。インタビューは、中国帰国者と支援者、中国帰国者支援相談員やケアマネジャーを含む17人に実施した。また、参与観察はB市で中国帰国者交流支援センターが実施している高齢者介護予防教室とC市でボランティア団体が開催している日本語教室で行った。本報告では、参与観察及び3名へのインタビュー調査データを活用する。

3. 3人の高齢中国帰国者

Dさん（84歳）は中国残留孤児として中国に残留し、50歳代で2回の一時帰国を果たした。その後Dさんは中国に家建てたが、60歳になって家族とともに日本に永住帰国した。Dさんの永住帰国は他の中国帰国者と比べて遅い。しかし、DさんはB市の夜間中学校に通い、日本語をマスターし、以降中国帰国者支援センターが開催している日本語教室や高齢者介護予防教室、地域の生き生きサロンに出席している。高齢者介護予防教室では、中国語で健康や生活情報が周知されているが、Dさんはそこでも日本語で会話をしようと努力している。彼は、近隣に住んでいる中国帰国者への通訳で忙しい毎日を過ごしている。中国残留孤児のEさん（72歳）は、中国では薬剤師として働きながら、大学で日本語を学び、帰国後、薬剤師として働こうと考えていた。50歳代で帰国を果たしたが、自分の資格と日本語が日本社会で生かせないことを知りショックを受け、薬剤師の道を諦めた。一方で、偶然「ちぎり絵」に出会い、講師の免許を取得し、地域の文化センターで「ちぎり絵」を日本人や中国帰国者に教えている。また、Eさんは中国との交流を目的とするNPOを設立し、現地でも「ちぎり絵」を教える活動をしている。Eさんは「ちぎり絵が生きがいです」と語る。中国残留婦人の子供の配偶者であるFさん（70歳）は、37歳で日本に移住し、定年まで転職しながら働いた。Fさんは、定年後少ない年金と生活保護費を補うため、畑を借りて野菜を作り、精を出し、できた野菜を家族に分けることを楽しみにしている。Fさんは移住した直後から通っている日本語教室に継続して参加し、現在は最近移住してきた中国人夫妻に日本語を教えている。Fさんは「仕事をしたいけど仕事がない中、彼らと中国語と日本語で話しをするのが日々の楽しみ」と語っていた。Fさんの子供たちもこの日本語教室で、中国人技能実習生の通訳や生活相談等を行っている。

4. 考察

高齢者は一つの年齢グループとして括られることが多い。しかし、高齢者の健康年齢は伸びており、身体的そして文化的にも高齢者は多様化している。そのような状況の中で、高齢移民を「他者化」し、「弱い人」、「特別なニーズ」が必要な人というカテゴリーに入れていいのだろうか。本報告で取り上げた3名は、中高年齢期に日本に移住（帰国）し、苦い経験と定年後の不安定な経済問題を抱えている。しかし、彼らは地域の多様な支援資源を活用し、楽しみや生きがいを見出していることが明らかになった。また、彼らは中国帰国者として支援を受ける側であったが、現在は中国から移住してきた人たちや隣人を支援する側となっている。このことから、グローバル化は、彼らにポジティブで新しい役割をもたらしていると思われる。高齢移民の語りから、彼らをひとまとまりの「弱い人」たちとして見るのではなく、違う文化と役割を持ちながら地域で生きる高齢者として認識する必要があるだろう。

参考文献

Warnes, A. and Williams, A. (2006). Older Migrants in Europe: A New Focus for Migration Studies. *Journal of Ethnic and Migration Studies*, Vol.32, No8, pp.1257-1281.

Torres, S. (2016). At the intersection between an elderly care regime and a migration regime: The Swedish case as an example. In K, Ute and T, Sandra (eds), *Ageing in Contexts of Migration*. Routledge.